

宮沢賢治 「文語詩稿 一百篇」 評釈 五

信時 哲郎

43 朝

① 早割れそめにし稲沼に、
いまころころと水鳴りて、
待宵草に置く露も、
睡たき風に萎むなり。

② 鬼げし風の襖子あをし着て、
児ら高らかに歌すれば、
遠き讒誣の傷あとも、
緑青いろにひかるなり。

大意

日照りによって割れはじめた稲田に、今、水がころころと音をたてて注ぎ始め、待宵草におりた露は、眠気を誘うような風に吹かれて萎み始めている。

鬼芥子のような赤い襖子あとしを着て、子供たちが高らかに歌をうたっていくと、水争いで悪口雑言を投げ合った傷跡も忘れたように、緑青色の稲が光っている。

モチーフ

独居自炊生活を始めてまだ間もない頃に取材した作品。大正十五年の早魘が終わる劇的な瞬間に立ち会ったのだろう。「讒誣」とは、農民たちとの諍いの記憶や早魘の際の水争いの記憶などが反映されているのかもしれないが、下書稿の書入れに「春の間の讒誣」とあり、また、文語詩定稿にも「遠き」とあることからすると、下根子に居を移す頃のいざこざ、あるいは農学校や父との関係、経済的な事情などを指しているのかもしれない。ただ、いずれにしても早魘が終わったことに対する喜びと感謝を詠ったものであることには違いない。

語注

早割れ 日照りによって稲田にひびが入ること。先行作品は、賢治が独居自炊生活を始めた大正十五年に書かれているが、この年は早害（その後に水害）の被害が大きかったという。木村東吉（『資料と考察』『春と修羅 第三集』『詩ノト』創作日付の日の気象状況）『近代文学の形成と展開 継承と展開8』和泉書院 平成十年二月）が盛岡気象台・水沢天文台で調べた結果によれば、「前日の夜は、盛岡と水沢で雷光を伴う雨」が記録されており、「この日は、早朝の雨も夜明け前には上がり、ちようど日の出前の時刻に出ていた霧も八時ころまでには晴れ、午前中良い天気で気温も上がった」という。

待宵草 南米原産のアカバナ科マツヨイグサ属の越年草。初夏から秋にかけて黄色い花を夕方に咲かせ、朝を迎える頃にはしぼんで赤くなる。「朝」と題された作品であることから、ここでの花色は赤かったことになる。しかし、先行作品である「七二七（アカシヤの木の洋燈ランプから）一九二六、七、一四、」下書稿（一）には「月見草」とあるので、もし月見草であったとすれば白い花が翌朝になってピンク色になっていたことになる。もともと『定本語彙辞典』にあるように、「一般に待宵草をすべて「月見草」の名で総称している場合が多い」とあることから、どちらかに限定することはむずかしい。

鬼げし 地中海から中近東を原産地とし、日本では明治時代以降、観賞用として栽培されるようになった。花径は十五〜二十センチほどで、赤、白、ピンクなどの色が咲く一年草。『世界大百科事典』には、ケシは安眠、多産、そして死と復活の象徴とされる、とある。「鬼げし風の襖子」とは、赤い色の襖子あとしのことを言いたかったのではないかと思う。

襖子^{あせし}

裏地をつけて仕立てた着物を袷というが、綿を入れることもあった。黒塚洋子（後掲）は、「襖子は袷や綿入れの衣なのでやはり冷夏を想像させる」と書いている。

譏誣 事実とは異なるいいがかりをつけて、相手をそしめること。読み方は「ざんぶ」。

評釈

「春と修羅 第三集」所収の「七二七」〔アカシヤの木の洋燈^{ランプ}から〕一九二六、七、一四、一を文語詩に改作したもの。黄野（22 22 行）詩稿用紙に書かれた「七二七」〔アカシヤの木の洋燈^{ランプ}から〕の下書稿（二）に文語詩の下書稿（一）（タイトルは「朝」。以降も同じ）、その余白に書かれた下書稿（二）（青インクで⑤）、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。

黒塚洋子（後掲）は、ラ行音を効果的に用いていること、各行ごとに色を織り込んでいること、「睡^スたき風」と「鬼^キげし風」をカゼとフウに使い分けて対にしていることなどの技巧について指摘し、さらに「流れるように歌われる三行目までは清音で描かれた明るく楽しい叙景であるのに対して、第四行目はそれをさえぎるように「譏誣」という濁音が入り、悲しさとやるせなさを秘めた私的体験の心情表現であるという点が注意をひく」と書く。

黒塚はそこから内容の検討に入り、「賢治は羅須地人協会時代の当初から「譏誣の傷」にかなり悩まされこだわっていたことがわかる」とし、数篇の詩をあげながら、「農民への同化を願いながらも彼等の封建性や頑迷さに苦しみその習慣を嫌悪する賢治の姿と、教師上がりの百姓など我々の仲間ではないと拒絶し中傷する農民の姿が浮かんでくる」とする。大角修（後掲）も、「農民のために無償で働きながら非難されたりしたことを意味すると思われる」としている。

ただ、伝記的に考えれば、羅須地人協会はこの年の八月二十三日（旧暦の七月十六日）に設立されたということから、まだ農民との間にはあまりトラブルも発生していなかったように思うし、早魃を扱った作品であることから、水争いであった可能性についても考えてよいかもしれない。独居自炊時代に賢治は稲作をし

ていなかったが、例えば散文「（或る農学生の日誌）」の「一千九百二十六年六月十四日」の章には次のような記述がある。

水が来なくなって下田の代掻ができなくなってから今日で恰度十二日雨が降らない。いったいそらがどう変ったのだらう。あんな早魃の二年続いた記録が無いと測候所が云ったのにこれで三年続くわけでないか。大堰の水もまるで四寸ぐらゐしかない。

夕方になってやつといままでの分へ一わたり水がかかった。

三時ごろ水がさっぱり来なくなったからどうしたのかと思って大堰の下の岐れまで行ってみたら権十がこつちをとめてじぶんの方へ向けてゐた。ぼくはまるで権十が甘藍の夜盗虫みたいな気がした。顔がむくむく膨れてゐて、おまけにあんな冠らなくてもいゝやうな穴のあいたつばの下った土方しゃつぽをかぶってその上からまた頬かぶりをしてゐるのだ。

手も足も膨れてゐるからぼくはまるで権十が夜盗虫みたいな気がした。何をするんだと云ったら、なんだ、農学校終つたって自分だけいゝことをするなと云ふのだ。

ぼくもむつとした。何だ、農学校なぞ終つても終らなくてもいまはぼくのとこの番にあたって水を引いてゐるのだ。それを盗んで行くとは何だ。と云ったら学校へ入つたんでしゃべれるやうになつたもんな、と云ふ。ぼくはもう大きな石をたたきつけてやらうとさへ思った。

けれども権十はそのまゝ行つてしまつたから、ぼくは水をうちの方へ向け直した。やっぱり権十はぼくを子供だと思つてぼくだけ居たものだからあんなことをしたのだ。いまにみる、ぼくは卑怯なやつらはみんな片っぱしから叩きつけてやるから。

もちろんこれは創作だが、大正十三年から十四年、十五年と三年連続して早害に襲われたことは事実で、「或る農学生の日誌」における「一千九百二十六年六月十四日」と言えば、取材時とも近いことから、大正十五年当時、賢治が早害に

ついでどう思っていたかを考える材料にはなるだろう。

しかし本作の先行作品である「七二七」「アカシヤの木の洋燈ランプから」の下書稿(二)の書入れには、「かあいさうに莢豌豆のレアカーを引いて／春の間の讒誣の傷を／緑青いろに胸にひからせ／アカシヤのラムプのなかを」という書き込みがある。下書稿(一)の手入れ段階で「レアカー」のことを「おれの車」と書いていることから、賢治自身が町にレアカーで莢豌豆を売りに行ったことを書いているのだとも思われるのだが、だとすれば、「おれ(＝賢治)」にとつての「讒誣」と思われるような出来事は「春の間」に起こったことにならないだろうか。

もっとも下書稿(二)の書入れは後年のもので、文語詩化直前のもののようにも思えるので、虚構化されている可能性もないわけではない。「かあいさうに」という語も、普通は自分自身に向つて使う言葉でなく、第三者に向つて使う言葉である。ただ、そうした可能性をおいて伝記的に考えれば、「春の間の讒誣」というのは大正十五年の三月か四月頃、つまり、まだ農学校在職中、でなくとも独居自炊生活を始めたばかりであったことになり、農民とのトラブルではなく、農学校での問題、あるいは父との確執などのことを指している可能性もありそうだ。

また、下書稿(一)の手入れ段階には「棘ありてかつなつかしき／負債に就て追懐せよ」の言葉もある。『新校本全集』の年譜をめぐってみても、特に「負債」にあたるような内容は見当たらない。ただ、四月四日の記事には、賢治が移り住んだ下根子桜の別荘について、「一九二二(明治四五)年に祖父喜助が建てた家なのでかなり手入れが必要であったことと目的による改装もあり、大工の手を離れたあとは「多く自分ひとりでやった」という別荘の隣に住んでいた伊藤忠一による証言もあるのです、この際に負債を負ったのかもしれない。ただ、年譜には六月三日には県知事に宛てて「一時恩給請求書」を書き、七日には五二〇円の支給手続きを取っているともあるので、賢治が経済的にそれほど困窮していたわけでもなさそう。

ともあれ、稲沼には水が流れ出したことが、人間世界のいざこざをすべて吹き飛ばしてしまうかのような喜びであったと書くことが、本作の主意であったことにかわりはなさそう。

佐藤隆房(「大旱魃」 『宮沢賢治 素顔のわが友』 桜地人館 平成八年三月)は、こんなエピソードを書いている。

大正十四年、岩手県は特記すべき大旱魃でした。何しろ、今生きている人たちが一度も経験したこともない大旱魃だけに、村という村、家という家、人という人、一人として心配しない者はありません。

その時、賢治さんは農学校で水田を受け持っていました。指導機関である学校の水田だけに責任も心配もなみたいていではありません。暇があれば生徒を連れて行って、低い堰せきの水を桶で田に掻き入れる作業をしていました。

暑さは暑いし、早くかわのは早くし、生徒も先生も本当に血みどろの働きです。こうした毎日の奮闘に、筋も骨も焼き切れて、はや百計尽きようとしたある日です。雲行きが急に変になって来たかと思う間に、待ちに待った夕立が降って来ました。降って来たのです。みんなはただ呆然ぼうぜんとして嬉し涙にくれていきます。すっかり喜んでしまった賢治さんは、上着も帽子も靴も脱ぎ

「ああ面白い、ああ気持ちいい。このままいつまでも草といっしょに濡ぬれていたい」と言つて、田圃の畦をひよこひよこ歩いて、遙か向こうの方の田の端まで踊るように行つてしまいました。

佐藤は大正十四年のことだというのが、翌年の十五年は「あんな旱魃の二年続いた記録が無いと測候所が云つたのにこれで三年続くわけでないか」とされた年なので、水がころころと鳴れば、子供たちの歌声さえも高らかに聞こえ、「讒誣の傷あと」さえも「緑青いろにひか」っているように感じられたというのも無理はない。

ただ、農村の幸福を描くにしても、「鬼」や「讒誣」といった禍々しい語を配置するなど、甘く平和なだけの作品にはしていないことにも着目しておきたい(黒塚の指摘したように、ラ行音だけでなく濁音を配置したことも含まれよう)。甘いだけの作品にはしたくなかったようである。

先行研究

黒塚洋子「朝」(『宮沢賢治 文語詩の森』 柏プラーノ 平成十一年六月)

島田隆輔「八写稿V論」(『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』 朝文社 平成十七年十月)

二月)

大角修「おわりに」(『宮沢賢治』の誕生』 河出書房新社 平成二十二年五月)

44 「猥れて嘲笑めるはた寒き」

①猥れて嘲笑めるはた寒き、 凶つのみみをはらはんと

かへさままた経るしろあとの、 天は遷ろふ火の鱗。

②つめたき西の風きたり、 あららにひとの秘呪とりて、

粟の垂穂をうちみだし、 すすきを紅く燿やかす。

大意

馴染んでうちとけすぎて笑い顔を見せるのは寒々しく思われ、 そんな目を避けようと、

帰り道でまた通り過ぎる城跡から、 夕焼で赤く染まったうろこ雲が空を流れるのが見える。

冷たい西からの風が吹いてくると、 呪文のように口にした秘めたる恋人の名を荒々しく奪い、

エノコログサの穂をざわめかせ、 ススキにも赤い夕陽を映えさせていった。

モチーフ

稗貫農学校時代の賢治には、想いを寄せていた女性がいたようだが、その名前を口にしたところ西からの風に奪われていったという純情な詩のようだ。ただ、

「猥」、「嘲笑」、「凶つ」、「火の鱗」、「秘呪」といった語は、プラスのイメージでは捉えにくい。賢治は「小岩井農場」で、「じぶんとそれからたつたもひとつのたましひとつ／完全そして永久にどこまでもいっしょに行かうとする／この変態を恋愛といふ」と書いたが、晩期の賢治は、こうした抑制を批判し、恋愛や性を肯定的に描こうとしていた。だとすれば、恋愛を批判的に描こうとしたのではなく、恋愛に対して懐疑的であったかつての自分をモデルにした人物を、客観的に描こうとしたのかもしれない。

語注

猥れて嘲笑めるはた寒き 読み方は下書稿(三)に付されたルビから「なれて」だろう。『定本語彙辞典』は「みだらな嘲笑は、また(Ⅱはた)いかにも寒々」ととする。嘲笑は軽蔑の気持ちを含めて笑うという意味だが、ここでは男女が節度を失つてうちとけ、笑い顔を見せること。男性の笑いのことなのか、女性の笑いのことなのか、それとも両方のことなのかわかりにくい。高橋慶吾(「賢治先生」 「イーハトーヴォ」第一期) 1 (昭和十四年十一月) は、後年、賢治が小笠原露という女性とトラブルがあった際に、父・政次郎は「女の人に対する時は、歯を出して笑つたり、胸を広げてあたりすべきものではない」と戒めたというが、賢治も男女の関係については政次郎と同じように思っていたのだろう。

凶つのみみ 不吉な眼付きということだろう。奥本淳恵(後掲A)は、「なれなれしく誘惑的に接近してくる女性のまがまがしい目」とし、「推測するなら、古語の「馴る」(男女の関係で、親しむ、なじむ)の意と漢語「猥」(みだら。男女間のだらしないこと)の意との両方を表現したかったということか」とする。読み方は「まがつ」であろうが、「まがつび」の語は「二百篇」にばかり何度か登場する語。これは日本神話にみえる神の名で、マガはよくないこと、ツは助詞で「の」の意味。ヒは神霊を示す。古事記や日本書紀によれば、伊弉諾尊が黄泉国のけがれを清めるための禊をした際に生まれたとされる。凶事を引き起こす神とされるが、後にこの神を祀ることで災厄から逃れられると考えられる。

ようになり、厄除けの守護神として信仰されるようになった。

火の鱗 夕陽で赤く染まった鱗雲うろこぐも（巻積雲）のこと。秋を代表する雲で、天気の下り坂の時にしやすい。

秘呪 『定本語彙辞典』は「秋の冷たい西風が、荒々しく人間の秘密の呪力をそなえて吹く」としているが、下書稿(三)には「ひとの秘呪」を「きみが名を」に改める段階があり、下書稿(一)には「西風きみが名をとりて」とあることから、秘密にしている恋人の名前を西風に奪われたという意味だろう。

粟の垂穂 古くから食用に用いられた雑穀で五穀の一つに数えられる。ただ、作品の舞台は街中なので、同種の雑草エノコログサ（ネコジヤラシ）のことだろう。

評釈

黄野（260行）詩稿用紙に書かれた下書稿(一)（藍インクで㊶）、その裏面に書かれた下書稿(二)、下書稿(二)を削除した後、すぐその下に書かれた下書稿(三)（タイトルは「判事」。その後「帰途」に変えようとして中止）、黄野（222行）詩稿用紙に書かれた下書稿(四)（タイトルは「検事」、後に「判事」。㊶の印はどの原稿にもない）、定稿用紙に書かれた定稿の五種が現存。定稿の一行目末尾には読点がない。生前発表なし。『新校本全集』に指摘はないが、島田隆輔（後掲）は、「冬のスケッチ」の第四四葉が元になっていると指摘している。

まず、島田が指摘する「〔冬のスケッチ〕」から見てみたい。

寂まりの桐のかれ上枝

点々かける赤のうろこぐも

※

火はまつすぐに燃えて

あるひは見えず

このとき

鳩かゞやいて飛んで行く。

※

灰いろはがねのいかりをいただき
われひとひらの粘土地を過ぎ
がけの下にて青くさの黄金を見
がけをのぼりてかれくさをふめり
雪きららかに落ち来れり。

最後の章は「未定稿」の「〔卑屈の友らをいきどほろしく〕」の下書稿であると『新校本全集』にも記されているものだが、稗貫農学校時代の学校周辺を舞台にしたものとして、本作との関連も深いと思われる。

さて、「猥れて嘲笑めるはた寒き」の下書稿(一)は次のようなものとなっている。

寂まりの桐のかれ上枝ほづえ

翔くるは赤きうろこ雲

あゝまた風のなかに来て
かなしく君が名をよべば
あけびのつるのかゞやきて
鳥は汽笛を吹きて過ぐ

「〔冬のスケッチ〕」が元になっているのは明らかだが、この後は「うろこ雲」という言葉以外は消えてしまう。新しく加わった後連のモチーフは、奥本淳恵（後掲B）も指摘するように『春と修羅（第一集）』所収の「マサニエロ」と関連が深いようである。

城のすすきの波の上には

伊太利亜製の空間がある

そこで鳥の群が踊る

白雲母しろうんものくもの幾きれ

(濠かんらんと橄欖びらうど天蚕絨、杉)

ぐみの木かそんなにひかつてゆするもの
七つの銀のすすきの穂

(お城の下の桐畑でも、ゆれてゐるゆれてゐる、桐が)

赤い蓼たての花もうごく

すゞめ すゞめ

ゆつくり杉に飛んで稲にはいる

そこはどての陰で気流もないので

そんなにゆつくり飛べるのだ

(なんだか風と悲しさのために胸がつまる)

ひとの名前をなんべんも

風のなかで繰り返してさしつかえないか

(もうみんな鍬や縄をもち

崖をおりてきていゝころだ)

いまは鳥のないしづかなそらに

またからすが横からはいる

屋根は矩形で傾斜白くひかり

こどもがふたりかけて行く

羽織をかざしてかける日本の子供ら

こんどは茶いろの雀どもの拋物線

金属製の桑のこつちを

もひとりこどもがゆつくり行く

蘆の穂は赤い赤い

(ロシヤだよ、チエホフだよ)

はこやなぎ しつかりゆれるゆれる

(ロシヤだよ ロシヤだよ)

鳥がもいちど飛びあがる

稀硫酸の中の亜鉛屑は鳥のむれ

お城の上のそらはこんどは支那のそら

烏三疋杉をすべり

四疋になつて回転する

制作日付は大正十一年十月十日となっているが、まだ稗貫農学校から花巻農学校に改称する以前、若葉町に移転する以前で、文語詩も季節は秋でイメージは繋がっている。「お城の下」や「赤い蓼の花」、「蘆の穂は赤い赤い」という言葉も関連性があるかもしれない。何より「ひとの名前をなんべんも／風のなかで繰り返してさしつかえないか」は決定的だと思う。

この「ひとの名前」について、恩田逸夫(「補注(春と修羅)」(『日本近代文学大系36 高村光太郎・宮沢賢治』角川書店 昭和四十六年六月)は、タイトルのマサニエロ(オーベル「ポルティチの唾娘」の主人公の名前)から妹トシを指すのではないかとする。しかし、恩田は『春と修羅(第一集)』所収の「松の針」に、「おまへがあんなにねつに燃され／あせやいたみでもだえてゐるとき／わたくしは日のとてるとこでたのしくはたらいたり／ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてゐた」とあることから、賢治の恋人を指した可能性についても書いている。『春と修羅(第一集)』を写していた頃の賢治には、例えば「第四梯形」で「青い抱擁衝動や／明るい雨の中のみたされない唇が／きれいにそらに溶けてゆく／日本の九月の気圏です」と書き、また「一本木野」で「こんなあかるい穹窿と草を／はんにちゆつくりあるくことは／いつたいたいなんといふおんけいだらう／わたくしはそれをはりつけとでもとりかへる／こひびとひとめみることでさへさうでないか」と書くような、具体的な恋愛対象がいたようである。栗原敦(「資料と研究・ところどころ⑩ 新校本全集訂正項目・「きみにならびて野にたてば賢治の恋」の△詩▽読解のこと」 「賢治研究115」 宮沢賢治研究会 平成二十一年十月)も、「春と修羅」の時代に、賢治に交際のあった女性が実在したことは、かつて小沢俊郎が記したとおり事実です。旧校本全集編纂時にそれが紹介されようとしてい

たことも事実です。そして、事情があつて公表の機会が失われたことも小沢の直話（昭和54・9・24）として承知しています」と書くとおりである。ここでも、恋人説を取りたいと思うが、だからといって解釈がこれ以上に進むというわけでもない。ただ、風の中で恋人の名前をつぶやくというようなことが、実体験としてもあつたようだということは記憶しておいてもよいかと思う。

しかし、下書稿(一)を手入れする段階では、「土木主幹のせなひろく／線路に添ひて帰りに行く」と第三者を主人公にする構想が立てられ、以降、下書稿(三)ではタイトルが「判事」、下書稿(四)では「検事」と、文語詩についてよく指摘される私性の排除がなされている。定稿になるとタイトルもなくなって、誰を視点にしたものなのか、どのような相手への思いなのかも分からなくなつて、誰を視点にしたもの

ただ、注意しておきたいのは、恋愛感情を描くのに「狼」、「嘲笑」、「凶つ」、「火の鱗」、「秘呪」と、プラスのイメージでは捉えにくい語が用いられていることだ。妹トシが病床にあつたことからくるやましき、また、「小岩井農場」で書かれたように、「じぶんとひとと萬象といっしよに／至上福しにいたらうとする／それをある宗教情操とするならば／そのねがひから碎けまたは疲れ／じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと／完全そして永久にどこまでもいっしよに行かうとする／この変態を恋愛といふ」という宗教的な思いからする恋愛に対する禁忌の意識がそう書かせたのかもしれない。しかし、文語詩制作中の賢治は、森荘巴池に「草や木や自然を書くようにエロのことを書きたい。」（昭和六年七月七日の日記）『宮沢賢治の肖像』昭和四十九年十月 津軽書房）と語っているような思いを抱いてもいたようで、文語詩定稿には、その表れとも思えるような作品が散見されることから、賢治には恋愛や性をむしろ謳歌する意識があつたように思われる。だとすれば、本作は恋愛を批判的に描こうとしたのではなく、さまざまの人々を描く中での一つの例として、過去の自分を第三者のように客観的に描こうとしているように思えてくる。

それにしても、賢治の恋愛経験などが具体的にわかると、単に興味深いというだけでなく、文語詩の解釈にも大きな発展が望めるのではないかという気がする。新しい資料の発見や紹介がされる日を待ちたい。

先行研究

島田隆輔「『冬のスケッチ』散逸稿／『文語詩稿』への過程から迫る試み」（『島大

国文26』 島大国文会 平成十年二月）

奥本淳恵A「宮沢賢治文語詩稿／双四聯Vの表現手法 詩篇「母」の場合」（『論

攷宮沢賢治7』 中四国宮沢賢治研究会 平成十八年七月）

奥本淳恵B「宮沢賢治の詩における外来語 口語詩篇「マサニエロ」と文語詩篇

「あかつき眠るみどり」を」の場合」（『安田文芸論叢 研究と資料 第二

輯』 安田女子大学日本文学科事務局 平成二十二年三月）

45 山石頸列

①西は箱ヶと毒ヶ森、

椀コ、南昌、東根の、

古き岩頸ネツケのドツ一列に、

氷霧あえかのまひるかな。

②からくみやこにたどりける、

芝雀は旅をものがたり、

「その小屋掛けのうしろには、

寒げなる山によきよきと、

立ちし」とばかり口つぐみ、

とみにわらひにまぎらして、

渋茶をしげにのみしてふ、

そのことまことうべなれや。

③山よほのぼのひらめきて、

わびしき雲をふりはらへ、

その雪尾根をかゞやかし、

野面のうれひを燃おほし了せ。

大意

西には箱ヶ森と毒ヶ森、 椀コ、南昌山、東根山の、

古い岩頸のネツケ一列が並び、 真昼だというのにほのかに氷霧が出ているようだ。

あちこちを巡り歩いてようやく都にたどりついた、旅芸人の芝雀は旅について語り、

「その小屋の後ろには、寒々しい山々がよきによきと、立っていて気味が悪かったよ」とだけ喋ると口をつぐみ、笑いに紛らせながら、洪茶をひんぱんにすすったというが、それもまことにもつともだ。

山よそろそろはつきりと姿を見せて、わびしい雲を振りはらってしまえ、その雪の積もった尾根を輝かせ、野のどんよりした思いを燃やし尽くしてくれ。

モチーフ

箱ヶ森から東根山に連なる岩頸列の景観の奇妙さについて、芝雀という（おそらくは）架空の旅芸人の視点を借りながら表現した作品。岩頸がよきによきと伸びていくものだというイメージは、賢治に親しいものだったようだ。唐突な旅芸人の登場は、永くここに住んだ者よりも、訪問者にこそ、その特異な風景が新鮮に感じられるものだったからではないかと思う。

語注

箱ヶ 盛岡市、雫石町、矢巾町にまたがる箱ヶ森（八六五・五m）のこと。「はこが」と読ませたかったのだろう。細田嘉吉（後掲B）によれば、南東の平地よりにある赤林山（八五五m）と一緒に矢筈森と呼ばれ、また、本来は鉢ヶ森と呼ばれるべき赤林山と箱ヶ森が混同されていたという。平地から見れば当然目に着くはずの山を賢治が書かなかつたのは「大正時代には「赤林山」の名称はまだまだ浸透していなかった」からだとする。大石雅之（後掲）や加藤碩一（「岩頸」『宮沢賢治地学用語辞典』愛智出版 平成二十三年九月）が書くように、大正五年三月発行（大日本帝国陸地測量部）の五万分の一地形図「日詰」には赤林山とあることから「浸透していなかった」とは言えないにしても、賢治が現在の赤林山のことを箱ヶ森と呼んでいた可能性は高い。松本隆（後掲）も、土地の古老が現在の赤林山を箱ヶ森と呼び、現在の箱ヶ森を枕森と呼

んでいたという証言を紹介している。

毒ヶ森 雫石町にある毒ヶ森（七八二m）のこと。賢治が自ら「経埋ムベキ山」とした界内三十二の山のうちの一つにリストアップされている。

椀コ 他の山は実在するのに（いくつかの説が分かれている場合もあるが）、一つだけ実在が確認できないのが「椀コ」である。①毒ヶ森の南西約一・二キロ地点にある大石山（五二七m）を指すという説（『語彙辞典』（平成元年十月 東京書籍）、奥田博（後掲A）、村上英一（後掲）、『新語彙辞典』（平成十一年七月）、②平地側から見て最も近くに大きく聳えている赤林山（八五五m）だとする説（大石雅之（後掲）、ブログ「宮沢賢治の里より」(<http://blog.goo.n.e.jp/suzukikeimori/> 平成二十三年二月二十八日〜三月三日)、③南昌山の北側にある七七一mのピーク（木津ヶ山。山頂には薬師岳という札があるという）を指すという説（細田（後掲A、B）、『新語彙辞典』初版補遺（平成十二年八月）、『定本語彙辞典』（平成二十五年八月）、④「椀コ」は「お椀の形のような」という意味なので南昌山の愛称だとする説（宮城一男（後掲A、B、C）、加藤碩一（後掲）、松本隆（後掲））が出ている。また、『新校本全集』では、「五十篇」の「月の鉛の雲さびに」の下書稿(五)〜(七)の余白にある岩頸列の線画について、「連山は明らかに箱ヶ森・毒ヶ森・南昌山等の岩頸列の山々である」とし、「ただし、このスケッチでは、右から、箱ヶ森・毒ヶ森・南昌山・椀コ・東根山と並んでおり、文語詩「岩頸列」とは、南昌山・椀コの順序が食い違っている」とある。「椀コ」が、何山を指すのかという論議ではないが、①〜④の論者の共感を得られそうにない見解を提出している。まず①の大石山説から検証してみたい。大石山は標高も低く、岩頸でもなさそうで、「一列」の語もふさわしくない。また、東方の矢巾町の側からは見えないという意味からも却下してよいかと思われる。②の赤林山説について、大石（後掲）は地図上で見て、箱ヶ森と毒ヶ森という西の列と、赤林、南昌、東根の東の列があるのだとするが、一望できるのは岩手山の頂上付近だというし、「岩頸の「一列」という言葉にもそぐわない。賢治が赤林山を書いていないのは、「アカバヤシ」という五音を使ってしまうと他の山に言及できないからであろう。③の七七一mのピー

ク説は、地図等にも名前が載っていないマイナーさが問題になるかと思う。④の「椀コ」を愛称とみる説については、山名が列挙される中で

「椀コ」のみが愛称で、単独の山を指していないのはバランスが悪いように思う。どれも一長一短だと思うが、③の七七一mのピーク説、つまり木津ヶ山（または薬師岳）だとするのが一番無難であるように思う。

細田の言うように、順番からしてここが最もふさわしいということ、そして写真を見ればわかるように「椀コ」のような形になっていると思われるからである。ただ、地図から立体的な

山の仮想写真を作成できるソフト（カシミール3D）にて、いろいろ試してみしたが、箱ヶ森、毒ヶ森、薬師岳、南昌山、東根山が一行にうまく並び、しかも薬師岳が「椀コ」のように見える場所は、見つけることができなかつた。「二月の鉛の雲さびに」の下書稿(五)(七)の余白にある岩頸列の線画を見てみると、「椀コ」にあたる山が描かれておらず、東根山は花巻あたりからでなくてはあ

そこまで山頂部が平らには見えないはずだし、南昌山と思われる山との距離も近すぎ、ピークの数や高さも実際とは異なっていることから、あくまで記憶の中のものであってスケッチではなく、位置関係まではつきり描かれたものではないなそうさ。つまり、賢治が岩頸を愛したことは違いないにしても、どこの地点から見た時にどう見えるかについてまで、写真のように正確に把握しきれていたわけではないことを示している。従って、③説が最も無理がないもののように思うとしたが、順序の認識があいまいであったとすれば、それも絶対的なものとは言えない。

南昌 雫石町と矢巾町の境にある釣鐘型をした南昌山（八四八m）のこと。盛岡



木津ヶ山（または薬師岳・右）と南昌山（左）
手代森小学校前から

では「南昌山に雨が降れば盛岡も雨」と言われる。この山の洞窟に青竜が住んでおり、毒気を吐いて雲を呼び、雨を降らせたという。元は毒ヶ森と呼ばれたが、元禄十六年に南部久信が毒の字を嫌って南昌山に改名したと言われる。頂上にはさまざまな石塔や石碑があり、地元の人たちの信奉も篤かつたようだ。賢治が「経埋ムベキ山」とした県内三十二の山のうちのの一つ。

東根 紫波町と雫石町にまたがる東根山（九二八・四m）のこと。ここも「経埋ムベキ山」のうちのの一つ。

岩頸 童話「檜の木大学生の野宿」では、大学生に次のように説明させている。「岩頸といふのは、地殻から一寸頸を出した太い岩石の棒である」「どうしてそんな変なものができたといふなら、そいつは蓋し簡単だ。え、こゝに一つの火山がある。熔岩を流す。その熔岩は地殻の深いところから太い棒になってのぼって来る。火山がだんだん衰へて、その腹の途中で冷えてしまふ。熔岩の棒もかたまってしまう。それから火山は永い間に空気や水のために、だんだん崩れる。たうとう削られてへらされて、しまひには上の方がすっかり無くなって、前のかたまった熔岩の棒だけが、やっと残るといふあんばいだ。この棒は大抵頸だけを出して、一つの山になってゐる。それが岩頸だ。岩手県の矢巾や雫石の近辺にはこの岩頸による奇妙な形の山が多い。岩手山に比べて古い火山であるとされており、『春と修羅（第一集）』の「小岩井農場」では、「あれはきつと／南昌山や沼森の系統だ／決して岩手火山に属しない」とある。



手代森小学校から岩頸群を臨む（カシミール3Dによる）

水霧

「細かな氷晶が多数空気中に浮かんで、霧のようにあたりがぼんやり見える現象。顕微鏡で氷晶を調べると、針状、柱状、板状などさまざまな形をしている。普通、気温が氷点下10℃あるいはさらに低いときに発生する。水霧を通して太陽が見えるときは、その周りに暈かきが現れたり、上下に延びる光柱が見えたりする。氷晶の数が比較的少ないときは細氷さいひょうとよばれる」（『日本大百科全書』。「二百篇」の「うたがふをやめよ」等にも登場する。

芝雀

歌舞伎役者の三代目中村雀右衛門じやくえもん（明治八年〜昭和二年）は、四代目中村芝雀しばじやくとして明治末年から大正にかけて上方を中心に活躍した。細田（後掲B）は、芝雀が盛岡劇場から岩頸を見たのだとし、松本（後掲）は、「賢治が東京に出ている時に、たまたま歌舞伎を見に出かけた。その時舞台に立った歌舞伎役者の芝雀が」、「興業がうまく行かなかったことを、自分たちの失敗を棚に上げ、周りの山までけなして、後は渋茶を飲んでごまかした」のだとする。ただ、岩頸のよきによきした様子は盛岡からではリアルに感じられないと思われるし、「西は箱ヶと毒ヶ森」とあるのに、盛岡からだど「西」の方角とはならない。また、賢治の経験に基づいたものだとする必要もないと思う。村上（後掲）は、「田舎まわりの役者と考えられる。詩の音律を考えると読みは「しじやく」としているが、それに従いたい。

評釈

黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿（タイトルは「岩頸列」。鉛筆で⑤）、定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。先行作品や関連作品の指摘はない。

一連は岩頸が並ぶ冬の或る日の状況をそのままに詠み、二連ではこの地での経験を旅芸人が別の場所で第三者に語る場面、三連では再び岩頸を前にして、山に語りかけるような言葉がつけられるという構造の作品である。

賢治が岩頸を愛していたことは、その景観や特性だけでなく、松本隆（後掲）がいうように、中学校時代の友人・藤原健次郎と何度も訪れた記憶とも関わっていたと思われるが、童話「檜の木大学士の野宿」にも、その魅力は充分に語られ

ている。

「歌稿〔B〕」の大正四年四月の項に、賢治は「240 毒ヶ森／南昌山の一つらは／ふとおどりたちてわがぬかにくる」という短歌を残しているが、鈴木健司（後掲）は、「毒ヶ森、南昌山のうちの一つが突然踊り立ち、伸びるようにして、遠く離れた自分の額に向かってくる、という内容の短歌」だと捉え、「檜の木大学士の野宿」にも「四人兄弟の岩頸で、／だんだん地面からせり上って来た」や、「注文通り岩頸は／丁度胸までせり出して」といった描写があり、岩頸四人兄弟の末子である「いたづらの弟」が、「そんなら僕一つおどかしてやらう」と、「光る大きな長い舌を出して／大学士の額をべろりと嘗めた」といった記述があることに関係を見出している。「岩頸列」では、芝雀に「寒げなる山によきよきと、／立ちし」ことを報告させているが、これは岩頸が伸びていることの表現であり、芝雀は、これに驚いてみやこに逃げ帰ったのだろうと言う。

賢治は見間違いや思い違いについて、好んで詩にしている。例えば『春と修羅（第一集）』の「高原」には、

海だべがど、おら、おもたれば

やつぱり光る山だぢやい

ホウ

髪の毛 風吹けば

鹿踊りだぢやい

とある。間違いではあっても、「海のように思えた」という錯覚、心の動きこそが重要なのだろう。しかし、二度目に同じ場所を訪れば、もうその「光る山」は山しか見えず、決して「海」だとは思わないだろう。つまり、経験を重ね、学習することによって、心の動きは抑制されてしまうのである。

『注文の多い料理店』の「広告ちらし」で、賢治は、自分が書いた物語は、「卑怯な成人たちに畢竟不可解」ではあっても、「純真な心意の所有者たち」ならば、「どんなに馬鹿げてゐても、難解でも必ず心の深部に於て万人の共通である」と

書いた。経験や知識が乏しいゆえに、「純真な心意」の持主である子供は多くの誤りを犯すが、それゆえに感じるはずのものが感じられなくなってしまう大人よりも、ずっと本質を見抜ける、ということなのだろう。

『注文の多い料理店』所収の童話「どんぐりと山猫」では、山猫からのハガキをもらった一郎は、うれしくて夜も寝られず、朝になって「おもてにでてみると、まはりの山は、みんなたつたいまできたばかりのやうにうるもりあがつて、まつ青なそらのしたにならんでゐるのを発見する。山を生命感にあふれたものにするのは、人間の心、すなわち「純真な心意」である。村上（後掲）は、この「うるうる」と本作における「によきによき」に類縁性を見出していたが、これは岩頸がによきによきと伸びるように感じられるという鈴木（後掲）の論にも繋がっていきそうだ。純真な心意の持ち主にこそ、岩頸は恐ろしいものを感じられやすいのだ。

さて、本作では旅芸人が岩頸をによきによきと伸びていくように感じたとしているが、旅芸人は子どもではない。しかし、いつも同じ風景を見ているわけではない人間であるからこそ、新鮮な感覚で風景に向き合うことができ、その結果として、子どものように「純真な心意の所有者」になり得たということなのだろう。日本中を歩き回り、さまざまな土地の名勝や奇景を見てきた旅芸人であっても、この岩手の奇景は珍しく、驚くべきものなのだ。賢治は岩手の人々に対して、自分たちが見慣れてしまった光景を再発見させようとしていたのである。古くは海外における浮世絵ブームが日本における浮世絵の見直しに繋がりが、近年では、海外におけるクールジャパンの音が、日本のオタク文化を再評価させた例もあるが、賢治はそんな効果を、この旅芸人・芝雀に負わせたかったのだと思う。

賢治は北海道への修学旅行に農学校の生徒を引率した際の「〔修学旅行復命書〕」（大正十三年）に次のように書いている。

車窓石狩川を見、次で落葉松と独乙唐檜との林地に入る。生徒等屢々風景を賞す。蓋し旅中は心緒新鮮にして実際と離るゝが故に審美容易に行はるゝなり。若し生徒等この旅を終へて郷に帰るの日新に欧米の観光客の心地を以てその山

川に臨まんか孰れかかの懐かしき広重北斎古版画の一片に非らんや。実に修練斯の如くならざるよりは田園の風と光とはその余りに鈍重なる労働の辛苦によりて影を失ひ、農業は傍観して神聖に自ら行ひて苦痛なる一の skinned milk たるに過ぎず。

旅人の目で見直してみれば、この岩手は驚くべき景観に満ちている。そんな思いが、本作にも込められていたのではないだろうか。気味の悪いぞつとする山。それこそが、賢治がこの一連なりの岩頸列に対して送った最大限の「賛辞」であったように思うのである。

先行研究

宮城一男A「南昌山・葛丸川」〔宮沢賢治 地学と文学のはざま〕 玉川大学出版

部 昭和五十二年四月)

小沢俊郎「賢治原稿雑見」〔小沢俊郎宮沢賢治論集1〕 有精堂 昭和六十二年三月)

宮城一男B「文語詩稿の地質学」〔「雪渡り 弘前・宮沢賢治研究会会誌5」 弘

前・宮沢賢治研究会 昭和六十二年九月)

奥田博A「毒ヶ森・椀コ（大石山）」〔宮沢賢治の山旅〕 東京新聞出版局 平成八年八月)

奥田博B「東根山・南昌山」〔宮沢賢治の山旅〕 東京新聞出版局 平成八年八月)

村上英一「岩頸列」〔宮沢賢治 文語詩の森〕 柏プラーノ 平成十一年六月)

宮城一男C「『農民の地学者』としての生活」〔宮沢賢治 農民の地学者〕 築地書館 平成十一年七月)

細田嘉吉A「『椀コ』はここだ」〔宮沢賢治記念館通信67〕 宮沢賢治記念館 平成十一年八月)

細田嘉吉B「文語詩「岩頸列」の“椀コ”考証」〔石で読み解く宮沢賢治〕 蒼丘書林 平成十八年五月)

加藤碩一「賢治の地質学とその背景」(『宮沢賢治の地的世界』 愛智出版 平成十八年十一月)

大石雅之「宮沢賢治の『岩頸列』のある山地に関する一考察」(『岩手の地学』39)

岩手県地学教育研究会 平成二十一年六月)

松本隆「賢治の詩「岩頸列」の「椀コ」についての考察」(『童話『銀河鉄道の

夜』の舞台は矢巾・南昌山』ツーワンライフ 平成二十二年十一月)

鈴木健司「『岩頸』意識について」(『宮沢賢治における地学的想像力』心象Vと

△現実Vの谷をわたる』蒼丘書林 平成二十二年五月)

46 病技師 「一」

①こよひの闇はあたたかし、
ステッキひけりにせものの、
風のなかにてなかんなど、
黒のステッキまたひけり。

②蝕む胸をまぎらひて、
くらき炭素の燈ひに照りて、
こぼと鳴り行く水のはた、
飢饉けいけつ供養の巨石おほいしな並めり。

大意

今宵の闇はどこかあたたかい、 風に吹かれて泣いてこよひかななどと、
ステッキをひいた、偽物の、 黒いステッキをまたひいた。
肺病からくる音と交りあって、 コボツと鳴る水の脇で、
暗闇の中のアークライトのあかりに照らされて、 飢饉を供養するための巨石が
並んでいる。

モチーフ

「『冬のスケッチ』」から、複雑な過程で成立した作品だが、岩手の飢饉に立ち向

かうべき技師が思い半ばで肺病に罹ってしまった無念さを詠んでいるように思う。
「風のなかになかん」や「ステッキひけりにせものの」は、賢治自身には思い入
れのある句であったのかもしれないが、ニュアンスがつかみにくい。

語注

病技師 「『冬のスケッチ』」に発した若い時代の作品であるため、賢治をモデル
とした人物ではないのかもしれないが、文語詩が晩年に書かれたことを思うと、
賢治その人の行状や思想も託されていると考えるべきだと思う。尚、読み方に
ついて、三谷弘美(後掲)は「びようぎし」、萩原昌好(『病技師』二)「宮
沢賢治 文語詩の森 第二集」柏ブラーノ 平成十二年九月)は、「やまいぎし」
と読ませている。ここでは「びようぎし」としたい。

ステッキ 洋風の杖のこと。「17世紀から19世紀にかけて、イギリスではスナツ

フ・ボックス *snuff box*(かぎタバコ入れ)とともに、紳士の最も重要なアクセ
サリーと考えられていた。とくに休日の散策や礼装には欠かせないものとされ
た。フランスでは女性の散歩のさいのアクセサリーとして流行した。19世紀に
は女性は長柄の parasol、男性は洋傘をステッキ兼用のアクセサリーとした。
これらの風習は徐々に衰えながらも1960年代ごろまでつづいたが、70年代には完
全に消滅した。日本では明治時代に輸入され、一時はかなりの普及をみた」
(『世界大百科事典』)とある。また、巖谷小波のエッセイ「指輪とステッキ」

(『女子処世ふところ鏡』 大倉書店 明治四十年十一月)では、「指輪とステ
ッキ。前者は女の飾りで、後者は男の伊達、共に文明的贅品なのである」と
あり、「この頃はわざと半程なかほどを握って、鈕つまみの方を下へ向けて提げたり、またち
と手の冷たい時には、外套の胸の鈕の所へ引かけたり、又手と一所に衣兜かぶしへ突
込んだりして行く。これでは無い方がよさうなものだが、それでも矢張り持
つて居る所、即ち紳士の伊達とする所と見える。「兎に角今日のステッキなる
物は、もはや護身の実用を離れて、紳士の容儀を作る道具、或は歩行中の無聊
を紛らす、一種の玩具たるに過ぎない」とされ、歩行のための補助用具として
のイメージはほとんどなかったようだ。ただ、「病技師」というタイトルを持つ

作品であり、また賢治が盛岡高等農林学校の卒業生であったことを考えれば、土性調査の時に使う検土杖けんどじょうのことをステッキと呼んだ可能性も考えられてよいだろう。長さは約1mほどで、地中にこれを差し込んで、先端についた土壌を採取する。英語では「ポーリングステッキ」というらしい。「未定稿」の「霧降る萱の細みちに」に「検土の杖はになへども」とある。また、童話「さいかち淵」には「手にはステッキみたいな鉄槌をもって」歩く人物が登場している。宮城一男（『農民の地学者』としての生活）『宮沢賢治 農民の地学者』築地書館 昭和五十年一月）によれば、弟の清六は、賢治が愛用したハンマーは六十センチほどあったというので、これを指した可能性もあろう。

にせもの 三谷弘美（後掲）は、本作におけるこの言葉が下書稿から定稿まで活かされていたことから、「だいぶ気に入っていた」のだろうとし、他の用例から「にせもの」といつても決して悪いニュアンスではない、ということ。共通しているのは、光に関連があるということだ。「病技師（二）」の下書稿にも「ステッキひかるにせもの／黒のステッキまたひかる」とあり、いずれも光っている状態が一瞬のうちに存在し、それが最高潮の状態として「にせもの」に相對している。光っている状態は、まるでスポットライトを浴びたかのように浮かび上がり、他の周りの物全てが闇に沈む、そういった状況ではあるまいか。本来は日常の中に埋もれて目立たぬものでも、光を媒体としてよりレベルアップする一瞬があり、その一瞬だけがほんものになるーゆえににせものなのである」とする。島田隆輔（後掲B）は、「技師としてこれまでにその身をあずけ、なしてきたことが、結局「にせもの」であったことを、ステッキというものに託して示唆しているのではないか」とする。賢治にとってこだわりのある表現ではあったようだが、両者の解釈も決定打とは思いにくい。両者の意見とは異なるが、視点人物は何らかの理由で「風のなかにてなかん」として家を出たのだが、そのようなことを家人や町の人に知られないようにするために、ステッキ（あるいは検土杖？ハンマー？）を、そのカモフラージュのために用いた（つまり「にせもの」という可能性もあるかと思う。あるいはもつと即物的に、検土杖やハンマーは、いわゆるステッキではないのだから、それ

を「にせもの」「ステッキ」である、と書いたのかもしれない。「病技師」のタイトルからすれば、案外これが一番スッキリした考え方なのかもしれない。**まぎらひて** 「まぎらふ」は入り混じって見分けがつかなくなることに。肺結核で胸を蝕まれた結果、呼吸するたびにコボコボという水泡音（湿性ラ音）が聞こえ、それが小川の水音と交じってしまったということだろう。昭和八年九月十一日の柳原昌悦宛書簡に「今度はラッセル音容易に除こらず、咳がはじまると仕事も何も手につかずまる二時間も続いたり、或は夜中胸がびうびう鳴って眠られなかつたり、中々もう全い健康は得られさうもありません」とある。

炭素の燈 炭素棒を放電させ、弧形（アーチ型）の強い光を出させたもの。アー

クライト。

飢饉供養の巨石 花巻市双葉町にある浄土宗・松庵寺にある供養塔のこと。宝曆、

天明、天保といった大飢饉の際に施粥釜で救済にあたり、北は八戸から、南は若柳（宮城県）から訪れる者がいたという。それでも餓死する者も多く、彼らを弔って埋葬し、供養塔が建てられることとなった。大きいものは一五〇センチほどになる。

評釈

「冬のスケッチ」の第十三葉に鉛筆で手入れた下書稿(一)、「冬のスケッチ」第三八葉（下書稿(三)にそのまま生かされている）に書かれた下書稿(二)、黄野（260行）詩稿用紙に書かれた下書稿(二)（赤インクで⑦）、黄野（260行）詩稿用紙に書かれた下書稿(三)（藍インクで⑧）、手入れ段階で「春」のタイトル案）、黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿(四)（タイトルは「夜」、次いで「亡友」）、その裏面に書かれた下書稿(五)（これ以降の全てに「病技師」のタイトル）、その余白に書かれた下書稿(六)（鉛筆で⑨）、定稿用紙に書かれた定稿の七種が現存。生前発表なし。下書稿(二)の後半が「一百篇」の「ひかりものすとうなるごが」に、また、『新校本全集』で下書稿(三)の内容が「未定稿」の「郡属伊原忠右エ門」に類似していることが指摘されている。

下書稿(一)の初期形態から見ている。

※

風の中にて
ステッキ光れり
かのにせものの
黒のステッキ。

※

風の中を
なかんとしていでたてるなり
千人供養の
石にともれるよるの電燈

※

やみとかぜとのなかにして
こなにまぶれし水車屋は
にはかにせきし歩みさる
西天なほも 水明り。

下書稿(二)では、下書稿(一)の後半の二連(「風の中を」と「なほさながらに」)を
元に、

風の中を
なかんとしていでたてるなり
千人供養の
石にともれる二燭の電燈
やみとかぜとのかなたにて
光りものとも見えにける
こなにまぶれし水車屋は

にはかにせきし身を折りて

水明りせる西天に

いとつゝましく歩み去る

とされ、下書稿(三)は、下書稿(一)の前半一連(「風の中にて」と下書稿(一)とされる
「冬のスケッチ」)第三八葉の「眩ぐるき／ひかりのうつろ、／のびたちて／い
ちじくゆるゝ／天狗巢のよもぎ。」が合体されて成立する。

めまぐるきひかりのうつろ

のびたちて

いちじくゆるゝ天狗巢のよもぎ

風のなかにて

ステッキ光れり

かのにせものの

黒のステッキ

ただ、これ以降の段階では、下書稿(二)にあった「光りものす」や「水車屋」の
モチーフが「一百篇」の「ひかりものすとうなるゝが」に引き渡される。参考
までに同詩の定稿をあげておこう。

ひかりものすとうなるゝが、

そは高甲の水車場の、

にはかに咳し身を折りて、

よるの胡桃の樹をはなれ、

古りたる沼をさながらの、

ひそにすがりてゆびさせる、

こなにまぶれしそのあるじ、

水こぼこぼとながれたる、

肩つゝましくすぼめつゝ、

西の微光にあゆみ去るなり。

残った要素が「夜」と題された下書稿(四)になるが、だいぶ定稿に近づいている。

こよひの闇はあたゝかし
風のなかにて泣かんなど
ひとステットをとりこしに

こぼと鳴り行く水のはた

饑饉^{ケカツ}供養の石の上に

あかくともれる二燭の電燈^ひ

下書稿(三)に「いちじくゆるゝ天狗巢のよもぎ」とあるが、三谷弘美(後掲)は「天狗巢のよもぎ」について「寄生した菌のため、そこから多数の枝がほうきのように生える病氣」であることを指摘し、それを「胸を蝕む病巢のイメージそのもの」だとするが、その可能性は十分にあるだろう(ちなみに、三谷が指摘するように「いちじく」は果物の無花果^{イチジク}ではなく、「著しく」の賢治流表現なのだろう)。そして「「ひかりものすとうなぬごが」」や下書稿(四)の「夜」における「こぼ(こぼ)」という水の音も、やはり三谷や赤田秀子(後掲)が指摘するように、肺病のイメージが重ねられているのだと思われる(もともと「こぼこぼ」は賢治が愛した擬音語のようで、「春と修羅 第二集」の「一九五 塚と風 一九二四、九、一〇、」や「未定稿」の「「こんにやくの」」、散文「或る農学生の日誌」」などに、ただ水の音として登場する)。

「「冬のスケッチ」」がいつ書かれたのかはわからないが、稗貫農学校で教鞭をとるようになった大正十年冬が含まれていることは確かだと思う。賢治には自分が肺をやられているという自覚が、大正七年に肋膜炎を病んだ時以降にはあったと思われるが、農学校教員時代の賢治が、果して自分が結核を発病し、肺の音をコボコボとさせていたとは思いくい。生徒への感染を気にしただろうし、昭和七年二月十九日の杉山芳松宛書簡の段階でも、「肺炎後の気管支炎」と書き、「今度も幸に肺結核にはならず済みました」としているからである。

では、なぜ「なかとていでたてる」のかとなるが、即座に判断はできない。

ただ、「冬のスケッチ」には恋愛(と宗教)の悩みのようなものが多く書き記されていることから、そんな思いからステッキを手に外に出たのではないかと思われる。そこで、千人供養塔を改めて見て(生家から一五〇mほどの所にあったので、普段ならその存在を気に留めることもなかっただろうと思う)、飢饉によって命を失った多くの人と、今、恋愛(?)の悩みで感傷的な気分になっている自己とを比較したのではないだろうか。

その向こうに、粉にまみれているために咳をしているのか、あるいは肺病であったのか、これも判然としないが、「あるじ」が咳をしている姿を見る。先述のとおり、このモチーフは文語詩「「ひかりものすとうなぬごが」」に引き渡されるのだが、肺病のイメージは下書稿(四)にもしっかりと受け継がれ、「こぼと鳴り行く水のはた」と暗示にとどめることなく、「夜」とあったタイトル案を「亡友」に書き換えさせてもいる。

かくして「病技師」のタイトルが下書稿(五)で付けられることになるのだが、この頃には、肺病を病んだ人間としての自分自身を語っている側面があっただろう。

こよひの闇はあたたかし
風のなかにて泣かんなど
蝕む胸を立ちいづる

闇と風とのなかにして

ステッキひかるにせもの
黒のステッキまたひかる

こぼと鳴り行く水のはた
饑饉^{ケカツ}供養の石の上に

円くともれる二燭の電燈^ひ

ここではもう、粉でむせただけかもしれない「あるじ」のことも、「亡友」のこ

とも消えている。賢治自身とも思われる「病技師」が、胸の病をおして飢饉供養の石を見る姿だけが残る。

「〔冬のスケッチ〕」では自らの恋愛で悩んでいたようだし、肺病のモチーフも明らかではなかった。しかし、この段階以降、岩手の飢饉を救うべく奔走した技師が、思い半ばで胸を病んだというようにも読めてくる。定稿では、これをさらに凝縮するが、賢治の思い入れの強い詩句が読者の理解を妨げているくらいはあ

先行研究

吉見正信「修羅のふるさと」(『宮沢賢治の道程』八重岳書房 昭和五十七年二月)
佐藤勝治「『冬のスケッチ』の配列復元とその解説」(『宮沢賢治青春の秘唱』『冬のスケッチ』研究』十字屋書店 昭和五十九年四月)

山口達子「賢治「文語詩篇定稿」の成立」(『大谷女子大学紀要2012』大谷女子大学志学会 昭和六十一年一月)

小川金英「『銀河鉄道の夜』と花巻の習俗・信仰」(『宮沢賢治7』洋々社 昭和六十二年十一月)

三谷弘美「病技師(一)」(『宮沢賢治 文語詩の森』柏プラーノ 平成十一年六月)

赤田秀子「文語詩を読む その5 声に出してどう読むか?」(『天狗茸 けとばし了へば』を中心に) 「ワルトラワラ16」ワルトラワラの会 平成十四年六月)

中路正恒「宮沢賢治と飢饉の風土 「捨身の思想」とそのありか」(『東北学への招待』角川書店 平成十六年五月)

島田隆輔A「初期論」(『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』朝文社 平成十七年十二月)

島田隆輔B「原詩集の発展」(『宮沢賢治研究 文語詩集の成立 鉛筆・赤インクへ 写稿Vによる過程』(未刊行) 平成二十二年六月)

47 酸虹

◎鶯黄の柳いくそたび、 窓を掃ふと出でたちて、
片頬むなしき郡長、 酸えたる虹をわらふなり。

大意

美しい黄色い柳の新芽が何度も、 窓をこすっているのを見てふと出で立ち、
郡長は片頬だけで、 色あせた虹を見てふとはかない笑みを浮かべた。

モチーフ

郡長と言えば社会的な地位も高い一種の権力者であったが、柳の新芽や色あせた虹を目にして、ふっと表情をゆるめる。片頬だけのわずかな変化でしか感情を表現しない近代知識人の悲哀とを描こうとしたのではないかと思う。ただ、これを逆に考えれば、近代の官僚制においても、人間と自然のつながりは留めることができないうのだという詩だとも解することができる。

語注

酸虹 『定本語彙辞典』には「酒等が古くなると酸っぱくなるように、消えかかって色彩が薄くなった虹を指す」とし、「賢治の造語」とある。赤田秀子(後掲)は、文語詩における「酸」の語に注目し、「〔南風の頬に酸くして〕」、「コバルト山地」、「心相」(すべて「二百篇」所収)とともに本作をあげ、味の酸っぱさについては「未定稿」の「〔ひとびと酸き胡瓜を噛み〕」がある程度で、それ以外の使いの方が多いことを指摘し、「かつて、すきとほった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光のみ、イーハトーブという王国を築いた詩人は、文語詩創作に向き合っていたこの時期、風は酸っぱく、疲労を自覚させ、世界が酸えていく感触を感じていた。それはとりもなおさず詩人が心身の衰えを感じて負のエネルギーに敏感になっていったということであろう」とする。下書稿(六)

には「さんこう」とルビを付けている。

鶯黄 ガコウと読む。ガチョウのヒナの淡黄色が美しいことから、菊、柳、酒などの黄色くて美しいものをたとえる。

評釈

「〔冬のスケッチ〕」の第四二・四三葉に書かれた下書稿(一) (タイトルは「光酸」)、黄野 (260行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(二) (タイトルは「光酸」)、その余白に書かれた下書稿(三) (藍インクで①)、その裏面に書かれた下書稿(四) (タイトルは「郡衙」)、黄野 (220行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(五)、その裏面に書かれた下書稿(六) (タイトルは「酸虹」^{さんこう})。藍インクで②、定稿用紙に書かれた定稿の七種が現存。生前発表なし。関連作品等の指摘は特にないが、「〔冬のスケッチ〕」の第四二・四三葉は「未定稿」の「〔雲を濾し〕」の先行作品であり、第四二葉にある詩句は「一百篇」の「〔塀のあなたに嘉菟治かも〕」や「四時」にも登場することから原初的な経験やイメージは共通していたものと思われる。定稿に丸番号はないが、冒頭に◎があり、『新校本全集』では、これを「二行一連構成であること」を示していると解される」としている。

本作については、下書の過程で内容が大きく変わっていったことが指摘されるが、ここでも下書稿(一)から見えていきたい。

※ 光酸

いつしか雲の重りきて、
光の酸をふりそゞぎ、
電線小鳥 肩まるく、
ほのかになきて溶けんとす。

春先の自然を詠んだもので、人間は登場しない。が、下書稿(三)では、この天気
に誘い出されたかのようにして人間たちが現われる。

「〔冬のスケッチ〕」第四三葉には、下書稿(一)として先にあげた箇所が続いて

「かぜのうつろのぼやけた黄いろ／かれ草とはりがね、 郡役所／ひるのつめた
いうつろのなかに／あめそゞぎ出でひのきはみだるる。」とあるが、これをひきつ
いだのだろう。

あしたはかれ草のどて

柳硫黄の粒吐けるを、

鹿鳴館の古き貴賓、

上席書記頬痩せてわらひ来り

肥料倉庫の屋根の上に

エレキましろくうづまけば

青土いろのマント着て

技手は役所へ帰り来る

「鹿鳴館」というともものしいが「肥料倉庫」や「役所」ともあることから、
舞台は明治時代の鹿鳴館ではなく、稗貫郡の郡役所であったようだ。賢治は稗貫
農学校に勤務していたが、大正十二年四月に県立花巻農学校に改称・移転するま
で、すぐ近くに稗貫郡役所があった。ちなみに郡役所も大正十五年六月には廃止
され、郡長もいなくなるが、「郡長」の語は文語詩定稿にまで残されている。

さて、下書稿(三)の手入れ段階で、タイトル「酸虹」の元となった「酸えたる
虹」がようやく登場する。一方、下書稿(三)に登場した「技手」は、下書稿(四)の手
入れ段階では「放蕩ふかき農事技手」や「女蕩しの農事技手」というストレート
な表現が取られる方向が示されるが、下書稿(五)では次のようになる。

牛酪^{バク}の粒噴く^{やなき}柳^{いと}の糸

しばしば掃ふ窓^{まど}にして

頬はむなしき^{こほりをき} 郡長

ねむたく虹を ながめたり

このとき土手の かれ草を

青にびマント ひるがへし

蚕桑^{くわさう}技手の 黒^{くろ}長^{ちやう}は

酔ひて村より 帰りくる

宮沢健太郎（後掲）は、「表出者は、はじめこの詩に「酸光」（朝日のまぶしい光）と題していたのだがそれがしだいに郡長のつかれ切った頬の感じ、農事技手の放蕩で疲弊した感じを中心に、疲れを「酸える」と転じ、光を虹と変え「酸虹」と視点をしぼっていったのである」とする。

下書稿(六)になると、「技手の黒金」が「後備大佐の甲齊」に変えられたのち、最終的には削除され、定稿では「郡長」のみを生かしたすっきりした二行詩になっている。「二百篇」所収作品に「（燈を紅き町の家より）」があり、これは郡役所からの電話であると偽って売笑婦が仕事場に電話をかけてくるという内容のもだが、テーマが重複するところを気にして本作の方でこのアイデアを削ったのではないかと思う。

理由はともあれ、せっかくドラマチックな要素が生まれたところで、賢治は早々に引っこめてしまったわけである。それでは賢治が描きたかったのは、いったい何だったのだろうか。

「酸えたる虹」と言いたいところだが、虹が登場するのは下書稿(四)以降である。人間の登場でさえ下書稿(三)からである。となると、当初から一貫しているものは、春先の光のみである。もちろん当初から変化していかないものこそが最も重要な要素だとは即断できないにしても、春先の光と人間との関わり、ということが結局のところ最大のテーマだったように思えるのである。

春と言えば、眠っていたものが一齐に生気を帯びて活躍しはじめる季節である。ことに東北地方では冬と春の差は顕著であろう。そして、性欲が頭を擡げる時期であり、『春と修羅』の春でもある。賢治はここで、具体的な事件や物語を織り込むのではなく、その嬉しくも妖しい春の雰囲気を出そうと思ったのではないだろう

か。

ところで、「片類」の用例を探してみると、「五十篇」の「（氷柱かゞやく窓のべに）」に「赤き九谷に茶をのみて、／片類ほゝえむ頼主幹、／つらゝ雪をひらめかす。」と登場し、また、「春と修羅 第三集」の「七二六 風景 一九二六、七、一四、」に、「松森蒼穹^{そら}に後光を出せば／片類黒い県会議員が／ひとりゆっくりにあるいてくる」という風に登場する。その他の例は探し出せていないが、少なくともこの三例を見る限り、彼らは中小の権力者の肩書を持っているという点で一致している。彼らは、もともとの性格というより、おそらくはその職務から感情を全面に出すことが許されなかったために、「片類」でしか感情を表すことができないのだろう（「片類黒い」は表情を表しているのではないかもしれない）。近代に生きる人間がどれほど抑圧されているかを示すものとも思える。

しかし、本作が中小の権力者を覆っている近代の圧力を描いているのだという以外の捉え方をすることも、できるかもしれない。

度十はいつも縄の帯をしめてわらって杜の中や畑の間をゆっくりにあるいてゐるのでした。

雨の中の青い藪を見てはよろこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔けて行く鷹を見付けてははねあがつて手をたゝいてみんなに知らせました。

けれどもあんまり子供らが度十をばかにして笑ふものですから度十はだんだん笑はないふりをするやうになりました。

風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどは度十はもううれしくてうれしくてひとりでに笑へて仕方ないのを、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついてごまかしながらいつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立ってゐるのでした。

時にはその大きくあいた口の横わきをさも痒いやうなふりをして指でこすりながらはあはあ息だけで笑ひました。

童話「度十公園林」の一節である。春先の光に誘われて郡役所を出て色あせた

虹を見あげ、片頬だけ表情を緩める郡長は、もしかしたら度十と同じ心性を持った人物なのかもしれない。権力者の肩書を持つ人間として、「ばかにして笑」われではなるまいと精一杯にがまんしながら、やはりどうにも春先の自然現象の変化がうれしくてたまらないために片頬だけ微笑をうかべてしまう人物だと解することではできないだろうか。そう思えば、わずか二行にしか過ぎない作品を、五度にもわたって改稿をしたのも理解できるように思うのである。

先行研究

宮沢賢治「賢治の語彙をめぐって」(『宮沢賢治 近代と反近代』 洋々社 平成三年九月)

宮沢健太郎「『文語詩稿一百篇』」(『国文学 解釈と鑑賞 65-2』 至文堂 平成十二年二月)

赤田秀子A「文語詩を読む その7 酸っぱいのは南風？ 虹？ 「酸虹」他」(『ワルトワラ 18』 ワルトワラの会 平成十五年六月)

赤田秀子B「シダレヤナギ (バビロン柳・枝垂柳)」(『イーハトーブ・ガーデン 宮沢賢治が愛した樹木や草花』 コールサック社 平成二十五年九月)